

一 評

OSHIKAWA, Lisa

*Making History Matter : Kuroita Katsumi
and the Construction of Imperial Japan*

(Harvard University Asia Center, 2017)

渡邊 剛

本書（邦題『歴史を重要にすること：黒板勝美と帝国本の形成』）は、ヨシカワ・リサ氏がイェール大学に提した博士論文を基礎としたものである。本書の概要は、〇一五年一月一九日開催の立教大学日本学研究所主催シンポジウム「史学史上の黒板勝美」において、著者が「近日本の国家形成と歴史学：黒板勝美を通じて」と題して告しており、他の報告、コメントとともに『立教大学日本学研究所年報』第一四・一五号（二〇一六年）に掲載されているので、拙書評でもわせてご覧頂ければ幸いである。

史苑（第七八巻第一号）

二

最初に、本書の構成と内容について紹介したい。まず構成について、以下に各章節を邦訳とともに示す。

序章 (Introduction)

学問と公的歴史の整合化 (Harmonizing Scholarship and Public History)

ある歴史家を回想する (Remembering a Historian)

第一章 歴史家の誕生 一八七四-一九六 (Becoming a Historian)

大村の子 (A Son of Omura)

第五高等中学校 (The Fifth Higher School)

明治中期の学界状況 (The Mid-Meiji State of the Field)

帝国大学における学生生活 (Student Life at the Imperial University)

第二章 史学の蘇生 一八九六-一九〇八 (Resuscitating the Historical Field)

大学院生活 (Graduate Life)

歴史家たちの技能の拡充 (Expanding the Historians' Crafts)

国史の執筆 (Writing Japanese History)

第三章 史学の確立 一九〇八—一八 (Entrenching the Historical Field)

欧米歴訪 (Touring Europe and America)

南北朝正閏問題 (The Southern-Northern Court Incident)

国史の書き直し (Rewriting Japanese History)

史蹟保存 (Historic Site Preservation)

第四章 今までも動つてゐる歴史 一九一八—二七 (History in Action)

歴史人物の顕彰 (Commemorating Historic Figures)

朝鮮史の形成 (Molding Korean History)

歴史家と関東大震災 (The Historians and the Earthquake)

過去と現在を巡る争ひ (Contesting Over the Past and the Present)

第五章 歴史家たちの「明白なる運命」一九二七—三六 (Historians' Manifest Destiny)

日本の拡大、東洋の拡大 (Expanding Japan, Expanding the Orient)

史学の全盛期 (The Field's Heyday)

研究機関の設立 (Founding Research Institutions)

帝国規模の歴史的祝祭 (Empire-wide Historic

Celebrations)

日本の「明白なる運命」(Japan's Manifest Destiny)

終章 歴史家の死、歴史家の遺産 (A historian's Death, A Historian's Bequest)

学者としての遺産 (The Scholar's Legacies)

教師としての遺産 (The Teacher's Legacies)

歴史が重要になる (History Matters)

付録 I 黒板勝美著作目録 (Kuroita Katsumi Bibliography)

付録 II 『国史の研究』各版の時代区分対照表 (Periodization in the Three Editions of "Kokushi")

参考文献 (Bibliography)

索引 (Index)

続いて、各章の内容を紹介する。

序章ではまず、世界史における歴史家のナショナルリズムへの貢献が語られ、プロイセン学派やアメリカのターナー、ビードといった諸外国の歴史家が果たした役割を、日本ではほぼ同世代の歴史家たち、すなわちアカデミズム史学の第二世代である三上参次、黒板勝美、辻善之助らが担ったとされる。従来の史学史においては、彼ら第二世代は純

然たる実証主義、あるいは無思想とされていたが、実際の彼らは国史学の基礎構築には政府の援助が不可欠であると理解し、国内的にはナシヨナリズム、対外的には例外主義という政府と一致した見解を主張することによって政府の援助を取り付け、国史学の基礎を固めたとされる。彼らの事蹟は現在の研究の基礎になっていると同時に、その歴史観が戦後に受け継がれているという意味で極めて重要であるが、未だ深く検討されておらず、本書は一八九〇年代から一九三〇年代にかけて、この第二世代の代表的存在として活躍した黒板に焦点を当てることで、アカデミズム史学の内実に迫るものであるという。

第一章は、黒板の長崎県大村での生誕から、帝国大学在学中までを描く。黒板の生育環境、大村中学、第五高等学校における学生生活が描かれるなかで、黒板が儒教的思想、ナシヨナリズムやエリート意識を育んだことが指摘される。明治政府と重野安繹や久米邦武といった草創期の歴史家の交錯と衝突によって、明治政府の修史事業による自己正当化、国史学の基礎建設がともに頓挫した状況が示されたうえで、帝大に入学した黒板が実証を駆使しつつ皇室崇拜や偉人顕彰に携わったことが描かれる。

第二章では、黒板の大学院時代から、一九〇八年の第一次洋行出発前までが描かれる。経済雑誌社における『国史

大系』校訂への従事、史料編纂掛での『大日本古文書』編纂など、研究生活を歩み始めた黒板であったが、大学院時代には既に同時代の学界を批判し、実証偏重からの脱却と社会の大勢の解明、あわせて補助学の充実を訴えていた点が指摘される。この時期の黒板は専門とする古文書学を大成する一方で考古学、神話学、歴史地理学などに関心を広げ、同時に印章論や古筆鑑定などによって歴史の有用性を社会に示すなど、幅広い活動を展開していた。『国史の研究』初版（一九〇八年）の刊行は、学問の体系化であるとともに国家を正当化する物語の提示であり、ここにいたって黒板は大学院時代の宿望をひとまず達成したとされる。

第三章は、黒板の第一次洋行（一九〇八—一九〇九年）を経て、黒板がより積極的にナシヨナリズムに貢献していく姿を描く。この洋行において、黒板は各地で学者と交流するとともに各国の情勢を観察、自己のナシヨナリズムを強め、帰国後に発生した南北朝正閏問題に際しては実証的立場から南朝正統を主張することで、国史学の政治的有用性を示したとされる。大正デモクラシーの高まりのなかでこの有用性は遺憾なく発揮され、『国史の研究』が改訂されて（総説の部一九一三年、各説の部一九一八年）国家の物語が再編・強化されるとともに、学問的見地のみならず国民教化の見地から博物館事業や史蹟保存事業の充実が訴えられて

いった。そしてこの時期には、国史学の有用性が次第に認知され、支持を受けるに至ったとされている。

第四章では、第一次世界大戦後の思想状況や関東大震災に対応して、黒板の活動がさらに拡大していく様子が描かれる。この時期の黒板は、大正国民の理想像として聖徳太子を描き、大規模な顕彰事業を展開するとともに、植民地支配の一環として総督府の歴史編纂事業に関与、『朝鮮史』編纂を進めていく。関東大震災は歴史家にも大きな損害を与えたが、黒板は帝室博物館復興賛会を組織するなどして歴史家として復興の一翼を担うと同時に、『国体新論』（一九二五年）で天皇中心・国民平等の古代国家像を提示して大正デモクラシーに対抗、国体の専門家としての地歩を固めていった様子が描かれている。

第五章は、黒板の第二次洋行（一九二七―二八年）から、病で倒れる一九三六年までを描く。第二次洋行中、黒板は東南アジアにおける日本人の活動の跡を訪ね、ペルシヤ芸術と古代日本芸術の親近性を感知することで、国史の枠組みや東洋の概念を拡大していったとされる。この時期には国史学は全盛期を迎えており、黒板は教え子たちを率いて様々な事業を展開していくが、理論主導の歴史学への対抗という意味を持った『新訂増補国史大系』など、その多くは従来のイデオロギーにもとづくものであったとされる。

政府の援助のみでは飽き足らない黒板は民間の資金をも活用、朝鮮古蹟研究会や日本古文化研究所などの研究機関を設立し、活動範囲を拡大していく。一九三〇年代に入ると、黒板は南朝関係の祝典を帝国規模で推進し、紀元二六〇〇年を期して国史館の建設を企図、『国史の研究』第三版（総説・各説上一九三二年、各説下一九三六年）などで同時代の日本の対外膨張を正当化していった。一九三六年に黒板は病に倒れ引退したが、もし現役のままであったなら、おそらく戦争協力に進んだと考えられるという。

終章では、黒板が病で引退した後の国史学、そして黒板の歴史的位置が語られる。黒板の事業の多くは教え子が引き継ぎ、その業績は戦後まで引き継がれた。黒板が牽引した日本の近代国史学は、ナショナリズムや植民地支配のために過去を利用し、その代わりに政府から学問への支援を引き出し、その基礎と権威を確立したと結論づけられるのである。

以上が各章の内容であるが、本書の巻末には参考文献と索引に加え、黒板の著作目録と黒板の著作に対する書評目録、本書中で言及された『国史の研究』各版における時代区分の対照表が添えられている。従来、黒板の著作目録としては黒板博士記念会編『古文化の保存と研究』（同会、一九五三年）所収の丸山二郎「黒板勝美博士の年譜と業績」

〔黒板勝美先生生誕百年記念会編『黒板勝美先生遺文』(吉川弘文館、一九七四年)に再録)、そして『古代文化』第四九卷第三号(一九九七年)所収の「黒板勝美博士年譜・著作目録」があったが、本書の著作目録はそれらに大増補を加えたものである。

三

続いて本書の意義、特色についてであるが、なんといいながらも黒板勝美に関する初の評伝的研究であるという点に、第一の意義と特色が求められよう。先述のシンポジウムにおいて、廣木尚氏は「黒板の活動を總体的に把握する作業」〔黒板の学問的実践を個別具体的に把握する評伝的研究〕の必要性を指摘したが、本書はまさにそれに該当する。もちろん、「黒板の学問的実践」は非常に多方面に及んでおり、個別の学説レベルまで手を広げればその把握と意義づけは容易ではなく、論者によって何を黒板の主業績と捉えるかも異なってはこよう。ここで仮に、前掲『古文化の保存と研究』において関係者が追憶・顕彰した黒板の業績をその主たるものとみなして検討の基準とすると、本書はその全てをカバーしていることが分かる。もちろん、本書が取り上げるのは黒板の主業績にとどまらない。数多くの回想

や新聞記事などを積極的に活用して、黒板の微細な活動に至るまで極力掘り上げて再構成しているのが本書の特色の一つであり、従来知られることが少なかった黒板の生い立ちや学生時代を自治体史や郷土史、学校史や大学史などを用いて明らかにした点、あるいは黒板の洋行に関してその足跡についての欧米圏の資料をも提示した点などは、評伝的研究として注目される。

さて、このような黒板の多方面にわたる事蹟はただ網羅的に提示されるのではなく、本書の副題である「帝国日本の形成」という観点からまとめあげられている。すなわち、黒板らアカデミズム第二世代の歴史家たちは、帝国日本と歩みをともし、その国民統合、対外膨張を正当化する日本史像を提示したのであり、それによって国家からの援助を獲得し、国史学の基礎を築き上げたのだという。このようなアカデミズム第二世代による国家との(共犯関係)の強調は、純然たる研究が時の政府によって弾圧を受けたとする大久保利謙の「ゆがめられた歴史」(『日本近代史学の成立』(大久保利謙歴史著作集7)、吉川弘文館、一九八八年所収。初出は一九五二年)に代表される見解への批判である。じっさい著者は欧米で影響力のある大久保史学史への異議申し立てを強く意識しており、シンポジウム報告でも強調されていたところである。一九九〇年代以降の日本

近代史学史研究、およびそのなかにおける黒板研究は、国史学の国民統合に果たした役割を批判的に検討する傾向を示しているが、本書はいわばその集大成的位置を占めていると評し得る。同時に、「例外主義」、「明白なる運命」といったアメリカ史学の術語の使用から分かる通り、各国の歴史家による国家史（創造）の日本版として黒板を位置づけている点は英語圏における研究書ならではの取り組みといえ、日本近代史学史に比較史的視座を提供している点も意義深い。

四

さて、本書の刊行を受け、黒板勝美およびアカデミズム史学研究、そして日本近代史学史研究が大きく前進したことは疑いないが、これを受けて今後の研究はいかなる方向に向かつていくべきであろうか。

この点については、先述のシンポジウムにおいて松沢裕作氏が提示した、「黒板勝美は、東京帝国大学を中心とする「アカデミズム史学」をどの程度代表しているのか」という問いが、今後の研究における重要な視点になってくると思われる。すなわち、大学外で華々しい活動を繰り広げる黒板の陰に隠れてしまいがちな、他のアカデミズム史学

の担い手たちとその営為全体に検討を広げていくことが、今後のアカデミズム史学研究には求められてこよう。特に、本書ではアカデミズム史学第二世代が黒板を代表とするほとんど一枚岩の集団のように描かれているが、果たしてそのような一体的理解が適切かどうか。国史研究室の設置をめぐる黒板・平泉澄と史料編纂所系グループの対立など、アカデミズム史学内部の差異を示唆する事柄を手がかりに、注意深く検討を進めていく必要がある⁵⁾。

この国史研究室設置の問題は好例と思われるが、アカデミズム史学内部をより深く検討していくにあたって、ナショナルリズムや国民統合といった論点よりも、各歴史家の史学方法論や研究過程における諸問題などがより明確な論点として浮かび上がる場合が多々ある。この点、本書の内容は主に前者を論題としたものであり、後者については未だ研究の余地があるように思われる。両者は截然と分かち得るものではないが、少なくとも歴史を研究する（歴史家）の検討である以上、今後は後者に軸足を置いた研究も求められてこよう。研究の一面期となる本書の刊行を慶ぶとともに、本書が大いに活用されて研究が深化発展することを願ってやまない。

（早稲田大学大学史資料センター非常勤嘱託）

註

(1) 廣木尚「近代日本史学史研究の現状と黒板勝美の位置」
『立教大学日本学研究所年報』一四・二五号、二〇一六年）
三〇頁。

(2) 参考として同書所収の各文章を掲げると、浅野長武「序」
／三成重敬「古文書の編纂」／工藤壮平「東山御文庫の整理」
／三成重敬「醍醐寺の古文書記録等の調査」／中島俊司「醍
醐寺奉賛会」／藤懸静也「史蹟・宝物の保護」／杉栄三郎「復
興博物館」／丸山二郎「帝室博物館翼賛会」／丸山二郎「仮
称国史館」／和田軍一「日本古文化研究所」／中島俊司「高
木文書の整理」／和田軍一「臨時陵墓調査委員会」／村田
俊彦「聖徳太子奉賛会」／丸山二郎「吉野神宮奉賛会」／
古谷清「日光宝物館」／堀田真快「高野山靈宝館」／下村
富士男・田山信郎「宝生院大須文庫」／井野辺茂雄「国史
大系の編纂(一)」／丸山二郎「国史大系の編纂(二)」／
岡本堅次・大久保利謙「地方史の編纂」／鳥羽正雄「農林
省林政史料の編纂」／藤田亮策「朝鮮古蹟調査」／中村栄
孝「朝鮮史の編修と朝鮮史料の蒐集」／丸山二郎「エスベ
ラント語」／岩生成一「黒板先生の海外旅行」／大久保利
謙「エール大学寄贈日本文化資料の蒐集」／坂本太郎「大
学に於ける黒板博士」、以上二七編である。

(3) 前掲廣木論文(註1)、二七―二九頁。

(4) 松沢裕作「コメント」(『立教大学日本学研究所年報』前
掲号所収) 三三―三五頁。

(5) この問題については若井敏明氏が『平泉澄』(ミネルヴァ
書房、二〇〇六年) 三一―三六、五〇―五四頁で触れており、
最近では佐藤雄基氏が、立教大学文学部史学科主催シンポ
ジウム「史学科の比較史・草創期から一九四五年」(二〇一七
年三月一〇日・一一日、於立教大学) における報告「東京

帝国大学における史学と国史・史料編纂事業との関わりと
卒業生進路から」で取り上げている。

(6) 近年、齋藤智志氏が、一九一〇年代以降の黒板が史蹟保
存論の中心的概念として「文化」を据えた点に着目してい
る。『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』(法政大学
出版局、二〇一五年) 二〇五―二一一頁。また山口道弘氏は、
黒板の「文化史」(文明史)志向を指摘する。「正閏統論」(『千
葉大学法学論集』第二八巻第三号、二〇一四年) 二一―二六
頁、「南北朝正閏論争と神皇正統記…漢文脈から文明史へ」
(『芸林』第六五巻第一号、二〇一六年) 一四五―一五〇頁。
このような「文化」(文化史)に対する黒板のまなざしは、
今後の研究における一つの論点となろう。

「付記」本書評は、平成二十六年立教大学学術推進特別重
点資金(立教SFR共同プロジェクト研究)「グローバル
ヒストリーのなかの近代歴史学」第十二回研究会「合評
会 Lisa Yoshikawa “Making History Matter: Kuroita
Katsumi and the Construction of Imperial Japan”
(二〇一七年八月一日、於立教大学) における評者の報告を
基にしたものである。

※訂正

本書評につきまして、左記の訂正がござります。

〈二八八頁・下段〉(誤)「国史館」(正)「国史館」

以上の誤りを謹んでお詫び申し上げます。

立教大学史学会史苑編集委員会